

大 ぞす

広島大学を卒業・修了後、各業界で活躍されている卒業生の方々に、
現在のお仕事と大学時代を語っていただきました。



たんとう・まさはる / 広島県出身。2004年に広島大学医学部を卒業後、2年間の臨床研修を経て医系技官として厚生労働省に入省。厚生科学課・国立国際医療研究センターなど、保健や医療に関するさまざまなポストを経験し、2023年より現職。

医学部医学科 出身

丹藤 昌治 さん

岐阜県健康福祉部
部長

広島大学の学びが教えてくれた 医系技官という道

私が医学を学ぼうと決意したきっかけは、当時躁うつ病に苦しめられていた友人が、治療を経て明るく笑えるようになった姿を見たことでした。人の気持ちや性格にまでアプローチできる医療の力を目の当たりにし、医学部に進学しました。

在学中の学びで印象に残っているのが、疾病の予防や健康の保持増進を目指す公衆衛生学という学問です。中でも、医系技官としても活躍する外部講師の言葉が私の将来を決定付けました。医系技官とは、医療の専門家として行政に携わる国家公務員のこと。社会と医療をつなぐ立場から発せられた「医師の仕事は病院や診療所にとどまらない。社会全体の健

康を守るのも医師免許を持つ者の役目だ」というメッセージに感銘を受け、私も医系技官になることを決めたのです。

いついかなる時も 国民の健康を守るために

厚生労働省に入省後は本省でのさまざまな職務を経て、2023年から岐阜県の健康福祉部の部長を務めています。保健医療計画の策定から健康増進のための事業の推進、さらには県議会での答弁や各医療組織との意見調整など、岐阜県の健康と医療に関する全ての分野に関わっています。社会に存在するあらゆる健康課題に対処する必要があるため、求められる知識やノウハウは多種多様。さまざまな団体と協力し、時には各医療分野における有識者の方々にもお力添えを

いただきながら、県民の皆さんの健康を支えるために日々奮闘しています。

現在、日本の医療行政では、大規模な自然災害や犯罪の発生など有事の際に人々の健康を守る「健康危機管理」の重要性が高まっています。今後も地域における医療体制の改善に努め、どのような状況でも健康を守れるような医療のあり方を実現したいと考えています。

広大のここがええね!

学生代表として学生と教員の橋渡しをしたり、バドミントン部設立のために奔走したり……。自らの学生時代を振り返ると、広島大学は多くの人と関わりを持てる魅力的な学び舎だったと感じています。